

# 文学における論理性について

（三年三学期特別授業における京都大学入試問題指導を通して）

守 本 哲 也



# 文学における論理性について

## 三年三学期特別授業における京都大学入試問題指導を通して

国語科教諭

守 本 哲 也

### 一. はじめに

令和四年度入学生より、新学習指導要領に移行する。いよいよ「論理国語」と「文学国語」に分かれる訳だが、「そんなに単純に分類できるものなのか」という声は多い。私自身も懐疑的であり、新学習指導要領の伝達講習は受講したものの、教科書がまだ一切公表されていないこともあり、よくわからない部分も多く、不安は大きい。新テストの時のように、土壇場で「やっぱりやめました」ということにはならないだろうが、今一度「文学に論理はないのか」「文学で論理は指導できないのか」ということについて考察しておきたい。今年度三年生を担当し、三学期の特別授業で京都大学受験予定者を週に二日担当することとなった。その中で過去に出題された文学作品も取り扱ったが、「これは論理的な構造そのものではないか」と思われる箇所があったので、それらについて取り上げていきたい。

### 二. 「痩せた雄鶏」(尾崎一雄)

この作品は、二〇二二年度入試において第一問として出題された。以下にまず本文と設問を引用しておく。

「圭ちゃん来年の夏休み、お父ちゃんと二人で、国府津の海へ行くんだ」

「ああ、いくとも。大磯へも、小田原へもいくよ、圭ちゃん二人で」

「うれしいな」二女は、眠っているときにしばしば見せる、あの夢のような笑顔をする。父親と二人で国府津の海岸へ行く、という何の変哲もない空想が、どうしてこの幼女をこんなに仕合せにするのだろう。あるいは、幼女の、病む父親にかけるあらゆる夢と希望とが、こんな変哲もないことに凝結されている、とでもいうのだろうか。

(1) ああ、これは、がんじがらめだ、死ぬにも死ねないというが、ほんとだな、と緒方は肚で溜息をつく。一方彼は、自分の例の

雄鶏気分が多分にくすぐられることを意識する。彼は、まんざらでもなくなり、よろしい治つてやる、治つてやらないまでも、むやみと死んだりほしないから安心したまえ、と、多分隣りの雄雞に似ているだろう氣負つた目つきになるのだつた。

実は、緒方が、以前よりどこかものやわらかな男になつたことには、もう一つ大きな原因がある。それは、彼が、自分の中に、(2) 誰にもぞかせない小さな部屋のようなものをつくつていく、という自覺にある。

毎日顔をつき合わせ、話をし、顔つきだけでも相手の氣持が大体判る、という家族の者も、緒方がそんな秘密の部屋を持つていゝとは知らない。恐らく彼らには、緒方がそれを隠そうとしなくても、その存在に氣がつくことはないだろう。何故なら、それは彼らに何のかかわりもなく、見たことも聞いたこともなく、考えたこともないだろうものだからだ。

とはいつても、それは別にこみ入つた話ではない。緒方のような境遇にある者なら、誰でも直ぐに了解するだろうことがらである。つまり、自分というものは何で生れて來たのか、何故生き、そうして何故死ぬのか、ということ、また、それを考えることによつてあとからあとと湧き出す種々雑多な疑問に何かの答を得ようとあせること、大体それに尽きるのである。そのことについて積み重ねられた多くの考えは、大昔から現在まで、その重みに堪えぬほどで、人間の全努力はそこに向つて集中されているかに見える。宗教、哲学、科学、芸術の巨大な集積は、すべてそこへの登路と思わ

れる。緒方もいつとなくそういうふうになつて教えられ、そういうものなんだろう、と思つてはいた。しかし、今の緒方から見ると、それは他人事であつた。

凡人のつねとして、緒方は、つねられて見なければ、痛さは判らぬのである。その上、自分でつねるのは余り好まない。文字や言葉の上では一応判り、時には自分でもそんな文字や言葉を吐き散らすこともないのではなかつたが、ただそれだけのことに過ぎなかつた。ちつとも身にしみてはいなかつた。

自分が病氣になり、どう考えても余り長い命でない、という事實にぶち當つたとき、緒方は始めて、痛い、と感じた。(3) 彼は、判り切つたことが判り切つたことでなくなつた。素通りして來たものを、改めて見直すと、ひどく新鮮であつた。ありふれたあたりのものも、心をとめて見ると、みんなただものではなくなつた。彼は自分の中の部屋に引きこもつて、それらを丹念に噛みくだき始めたのである。そういう時の彼は、自分だけであり、目先にちらつく家族は、心につながらる何物でもなかつた。

自分のこんな状態を、家族たちの誰に話そうと、まるで無益なことを彼は知つてゐる。これら天真らんまん、若い、生命に充ち溢れた人間たちに、それが通じようはずはない。通じないのが當然だし、通じるのは間違ひなのだ。彼らは、その生命の溢れるままに、泣き、笑い、歌つていなければいけない。緒方のような衰頹者の、夕暮れの思考は、彼らにとつては毒汁でしかないだろう。やがて彼らにも、避けがたい薄暮がおとずれるだろうが、それはその時のこ

とでいいのである。

だから緒方は、何気ない顔で、彼らとのつき合いをつづけている。顔をつき合せ、話のやりとりもそつがないのに、頭はまるで相手とかかわりない思考にとらわれている自分を、緒方は、惨酷な、冷たい奴と思う。しかし、自分のいのちについて、自分が考えずに、いったい誰が考えてくれるだろう。これは、病気を看護し、献身的努力で自分の生命を救ってくれ、あるいは生きのびさせてくれる、というようなことは、（それは感謝すべきことであり、好ましいことでもあるが、しかし）全く別の話なのだ、そう思う。緒方は、いのち、あるいは生というものについて、納得したいのだ、ただそれだけの、至極簡単なことなのだ。そしてそれは、自分で納得するより外、仕方がない。そのことは、ただ一人でしか向き合うことが出来ず、その作業はただ一人でしか出来ない。

せんだって、ある若い文学批評家から私信が来て、その端に、「赤ん坊ギアギア、女房プリプリ、雑事は山積で、このところ出家遁世を思うや切なるものがあります」とあった。緒方は「出家遁世ぐらい、家の中にいても出来ますから、試しにやってごらん下さい」と返事の中に書いた。何の気なしに書いたのだが、あとで、これは、と思ったのである。（４）どうも緒方の状態には、そういうえなくもない節がある。勿論、緒方は東洋流の、無常感、諦観の上にあぐらをかいているのではない。若しそうなら、彼は、文章など一行も書きはしないだろう。書く必要がないだろう。彼には、未だ野心と色気が残っている。

ただ、こっそりと自分だけの部屋を用意し、閑さえあれば（彼は、大体、普通の意味では閑人である）家族と離れてそこへもぐり込もうとする、どうやらこれは、一種の出家遁世かも知れない。

「寝ていて出家遁世出来る法、か。（５）俺の雄難精神も、影がうすくなった」

隣の難小屋では、また卵を生んだらしい。あの雄難の元気には、とても及ばない。いささかも遅疑逡巡するところない、あの気負いはどうだ。あれは立派で、堂々としている。あれを、したり顔に、滑稽だ、などとするのは、引かれ者の小唄かも知れない。俺も、いや俺は、疳癪を起さず、凝つと持ちこたえて行こう。堪え、忍び、時が早かろうと遅かろうと、そこまで静かに持ちこたえてゆく、——それが俺のやるべきことらしい、などと緒方は考えつづけた。

（尾崎一雄「瘦せた雄難」より）

- 問一 傍線部（１）のように緒方が感じるのはなぜか、説明せよ。
- 問二 傍線部（２）はどのようなものか、説明せよ。
- 問三 傍線部（３）はどのような事態を意味するのか、説明せよ。
- 問四 傍線部（４）のように緒方が考えるのはなぜか、説明せよ。
- 問五 傍線部（５）はどのようなものか、本文全体を踏まえて説明せよ。

さて、この作品は、基本的に「対比」の構造で構成されていると

言えるだろう。

まず問一について。傍線部（１）「ああ、これは、がんじがらめだ」における「緒方」の状態は、「自分が病気になる、どう考えても余り長い命でない、という事実にぶち当たったとき」の、「幼女の、病む父親にかけるあらゆる夢と希望」を感じ、「死ぬにも死ねない」と「吐で溜息をつく」というものである。

しかしその直後に「一方彼は、自分の例の雄鶏気分が多分にくすぐられることを意識」し、「よろしい治つてやる、治つてやらないまでも、むやみと死んだりほしくないから安心したまえ」と「気負った目つきになるのだった」とある。

この場面は「一方」という語をはさんで、死を間近なものとして感じている「緒方」の、片や「娘の期待には応えたいが、生死はどうしようもない」という困惑と、片や「娘の期待に応えたいので、生死を何とかしてやろう」という意欲とが「対比」的に描かれていると言えるだろう。

#### 【解答例】

病気のため自分の余命は長くないと思っているが、娘が来夏に自分と海へ行くことを楽しみにしているので、死ぬに死ねないと自分が精神的に束縛されているように思ったから。

次に問二について。傍線部（２）「誰にもものぞかせない小さな部屋のようなもの」とは、死を間近なものとして感じている「緒方」

が、「自分というものが何で生れて来たのか、何故生き、そうして何故死ぬのか」ということについて、内心密かに思考している様子を表したものである。ここでも「緒方」の、家族と「何気ない顔で、彼らとのつき合いをつづけている」外面と、「頭はまるで相手とかかわりない思考にとらわれている自分」の内面とが「対比」的に描かれている。

また、家族を「これら天真らんまん、若い、生命に充ち溢れた人間たち」と描写する一方で、自分のことは「衰頹者の、夕暮れの思考」だと、やはり「対比」的に描いている。

#### 【解答例】

死を間近なものに感じている緒方が、自分の生死やそれに関する多くの疑問にたった一人で向き合い、納得できる答えを得ようとして思考にとらわれている状態。

続いて問三について。傍線部（３）「彼には、判り切ったことが判りきったことでなくなった」は、傍線部自体において「判り切ったこと」と「判り切ったことでない」ことが「対比」されている。ここでの「判り切ったこと」とは、「自分というものは何で生れてきたのか、何故生き、そうして何故死ぬのか、ということ、また、それを考えることによつてあとからあとから湧き出す種々雑多な疑問」に「何かの答えを得よう」として、「大昔から現在まで」「そのことについて積み重ねられた多くの答え」を得て、「文字や言葉

の上では「応判」っていたことである。

それが、「判り切ったことでなくなった」というのは、「ちっとも身にしみてはいなかった」つまり、本当に理解していたのではなかったということに気がついたということである。

そのきっかけは、「病気になる、どう考えても余り長い命でない、という事実におち当たったとき」に「始めて、痛い、と感じた」ことである。これまで「緒方」は頭の中だけで観念的に物事を理解し、それで十分だと思っていたのだろう。しかしここで初めて物事を理解するとは、実感を伴ってこそのものだということが判ったのであろう。ここにはもう一つ「精神」と「肉体」、言い換えると「理性」と「感性」との「対比」を見ることもできるだろう。

また、これは「論理」自体という訳ではないが、この場面に見られる考え方は、評論で頻出の「身体論」「心身二元論」との関連がある。「論理国語」では、文学を取り上げてはならないらしいが、「文学国語」でも、評論を取り上げてはならないのであろうか。参考資料としてなら、可能であろうか。

#### 【解答例】

これまでは実感を伴わず、理屈の上だけで理解していた、あるのが当たり前で気にもとめなかった物事が、死を意識するようになってから、実感を伴って感じられるようになり、ありふれた物事も改めて注意して見てみると、新鮮で意味あるものとして感じられるようになった事態。

続いて問四について。傍線部(4)「どうも緒方の状態には、そういえないもない節がある」では、「ある若い文学批評家」と「緒方」とが「対比」的に描かれている。「ある若い文芸批評家」が、「赤ん坊ギヤアギヤア、女房プリプリ、雑事は山積」と、俗事に囲まれ、「このところ出家遁世を思うや切なるもの」があるのに対して、「緒方」は、確かに「未だ野心と色気が残って」おり、仕事や家族との関わりの煩わしさもあるだろうが、「彼は、大体、普通の意味では閑人であ」り、「こっそりと自分だけの部屋を用意し、閑さえあれば家族と離れてそこへもぐり込もうと」し、「どうやらこれは、一種の出家遁世かもしれない」と言う。ここでの両者には、俗事に追われるという共通点も見受けられるが、「出家遁世」については、実現できているかできていないかという「対比」が見られるだろう。

#### 【解答例】

東洋流の無常観や諦観によるものではないが、表面上は家族とのつき合いを続けながら、こっそりと心の中では一人で生死についての問いに答えを得ようとしている状態は、俗世のわずらわしさから逃れてするはずの出家遁世を自宅で行っていると言えることができるものだから。

最後に問五について。傍線部(5)「俺の雄鶏精神」は、「隣の鶏小屋」の「雄鶏」の「元氣」や「いささかも遅疑逡巡することのな

い」「気負い」、「立派」さや「堂々とし」た姿に影響されたものである。ここで「対比」されているのは、傍線部の前後も含み、「寝ていて出家遁世出来る法、か。俺の雄鶏精神も、影が薄くなった」である。つまり、問一でも触れた「雄鶏気分」、すなわち自分の病氣に対して前向きにとらえようとする「気負い」が、物事の本質について深く思考しているうちに、「出家遁世」しているような状態になっていることに気づき、すっかり薄らいだように感じているのである。

ただ、ここで注目したいのは、その後に続く「俺も、いや俺は、癪癪を起さず、凝つと持ちこたえて行こう。堪え、忍び、時が早かろうと遅かろうと、そこまで静かに持ちこたえてゆく、それが俺のやるべきことらしい、などと緒方は考えつづけた」という部分である。これは、まさしく「弁証法」における「止揚」ではないだろうか。つまり「雄鶏精神」と「雄鶏精神も、影が薄くなった」という矛盾した状況を、発展的に統合して、独自の境地を見いだしたというわけではないだろうか。

このように、「痩せた雄鶏」においては、基本的に「対比」の構造について、そしてさらに最後の場面では「弁証法」「止揚」について、「論理」を学習することができるのではないかではないだろうか。

#### 【解答例】

隣の鶏小屋にいる、元気で立派で堂々とした、ためらいのない気

負った雄鶏のように、自分も家族の期待に応えるべく病氣に立ち向かい、文筆活動にも野心と色気をもって取り組んでいこうとする強い意気込み。

以上のように述べてきたが、このように文学作品を分析してしまつと、味も素っ気もなくなつてしまふ。読書する際には、感性の赴くまま、もっと自由に作品世界を読み味わうべきであろう。ただし、作者はおそらく相当緻密な「計算」に基づいて作品を構成しているはずであり、それを再現して見せることは、小説を読み慣れていない初級者に対しては必要なことではないだろうか。まず「型」なり「作法」をしっかりと学び、反復訓練する中で「身につく」つまり身体化され、無意識のうちにできるようになるというのが、何事においても重要なことではないだろうか。

### 三. おわりに

拙稿は、尾崎一雄に関する先行論文を一切踏まえたものではなく、決して学術的な分析や考察によるものではないことは自覚している。指導の際にふと考えたことを、備忘録的に書き留めたにすぎないものである。しかし、本校にいるからこそ書けたと言えるかもしれない。世の中の変化、そして教育を取り巻く環境の変化には目まぐるしいものがある。確かに時代の流れ、変化には目を向けておかねばならないだろう。また、いつまでも旧態依然としたま

まで、時代の遺物のようになってしまうても良くないだろう。しかし、新テストの時のように突然の「手のひら返し」もある訳だから、絶えず「本質とは何か」をしつかりと見据えつつ、決して一時的な「流行」に流されることなく、指導に当たりたいものである。そのためには「深い」教材研究や「広い」周辺知識の研究、さらに「ゆつくりと」実践への振り返りができるような、「時間」と「心」のゆとりが持てる環境が必要であらう。

（2020年3月）